

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	高校前期：明治廿七年より大正七年まで
Author(s)	五高創立七十周年記念会；高森，良人
Citation	龍南への郷愁：41-74
Issue date	1957-10-10
Type	Book
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/10842">http://hdl.handle.net/2298/10842</a>
Right	

### 三、高校前期

明治廿七年より  
大正七年まで

森文部大臣の卓見と英斷に依つて、世に現れた高等中學校も、年を経ること七年にして、高等學校と改稱され、茲にその面目を一新した。而してこの改制の衝に當つたのは、井上（毅）文部大臣であつた。それは、從來の高等中學校が、次第に形式に流れ、卒業生も齡を重ね過ぎて、急速なる進歩に伴はぬものがあり、重大なる國際情勢に對處して、大いに實業の振興を圖らねばならなかつたからである。仍つて高等中學校を高等學校に改めて、將來、簡單なる大學と爲し、有爲の青年を一日も早く世に送り出すことを企てたが、帝國大學の反對を慮つて、さしあたり三高<sup>註</sup>の如く、大學豫科を廢して、専門學校の色彩を有せしめたとのことである。

明治二十六年三月、世の歡迎裏に、文部大臣に任ぜられると、前文相の意圖を體し、精神教育に實業教育を加へて、國家の實力涵養に力める爲に、六月、實業教育國庫補助法を定め、臨時教員養成所を興し、他の一面、高等學校を、單に大學の豫備教育に留めず、専門部を設けたのである。二十七年一月十二日、教育上の意見を左の如く明示した。

我が國ノ大學ハ、唯一ナリ、世人多クハ誤テ、支那ノ國子監ノ類トナシ、之ヲ以テ官紳登龍ノ一大關ト心得ルモノアリ、近時、京都ニ大學ヲ新設スルノ說アルモ亦、一ヲ増シニトスレバ足レリト云フ者ノ如シ、各國ニ參照スルニ、獨逸ノ大學ノ數ハ二十一ナリ、（中略）我國文運ノ進歩ハ、國運ト相伴ハザルベカラズ、而シテ大學豈一或ハニニシテ足レリトセンヤ、（中略）有用ナル大學ハ、豈兩都ニ限ルベケンヤ、（中略）姑ク英米ノ「コレージ」佛ノ「フワキユルテ」ノ制ニ依リ、高等専門學校トシ、而シテ其成績ニ從ヒ、與フルニ大學ノ名ヲ以テスルコト、未ダ晩シトセザルベシ、（中

略) 大學ノ卒業期ハ、二十六年ノ統計ニ據ルニ、平均二十六七歳ノ半ニ居ルニ至レリ、之ヲ各國ニ參照スルニ、英米佛ノ如キ、大學ノ卒業期ハ、大抵二十一歳ナリ、故ニ高等專門教育ヲ受クル者ノ爲ニ、一ノ捷路ヲ設クルハ、今日ノ必要ナリ、(中略) 故ニ今度ノ改正ニ高等中學校ヲ高等學校トシタルノ目的ハ、蓋、左ノ二點ニ在リ、

一、従前ノ高等普通教育ヲ授クル所ヲ移シテ、高等專門教育ヲ授クル所トシ、以テ世ノ需要ト少年ノ志望ヲ順達ス、二、高等學校ノ成績ニ從ヒテハ、將來ニ進メテ大學トスルノ地ヲ爲シ、以テ國家ノ文運ヲ進ム、(中略)

斯ノ如キ理由ノ下ニ於テ、高等學校ノ組織ハ變更セラレ、已ニ第三高等學校ニ、法學部・醫學部・工學部ヲ設置シ、第一・第二・第四・第五高等學校ニ、漸次時期ヲ以テ實施スルノ目的ヲ以テ、明治二十七年九月十一日ヨリ施行セラレタリ、云云

以てその抱負の一端を察することが出来よう。人と爲り謹嚴にして苦學力行、古今東西の學に通じ、文筆にも長じて居たことは、『梧陰存稿』の一編を繙いても明かで、明治憲法や教育勅語にも獻替を致したことは、茲に喋喋するまでもあるまい。

註

明治二十五年年度の豫算審議會に於て、もしも、優勢であつた野黨の修正案が通つたならば、第一・第三を除いて、第二・第四・第五の三高等中學校は、經費の削減によつて、危ふく姿を消すところであつた。幸にして、政府の斷行した議會の解散のために、漸く危機を脱したやうなものの、世の中は皮肉なものである。

◇ — ◇ — ◇

二十七年六月二十三日の勅令第七十五號高等學校令第二條には、

高等學校ハ専門學科ヲ教授スル所トス、但、帝國大學ニ入學スル者ノ爲メ、豫科ヲ設クルコトヲ得

と曰ひ、附則として、高等中學校の學科を履修する年限内に在る生徒の爲には、舊學科を存することは、之を認めて居る。

かくて、七月二日付の木下(廣次)専門學務局長の名を以て、本校も、いよいよ第五高等學校となつたのである。仍つて、九月十一日の揭示には、

今般、本校帽章及釦ヲ改正ス、

但、從來ノ生徒ハ、當分ノ内、從來ノ釦ヲ其儘用ユルコトハ苦カラズト雖モ、帽章ハ速カニ更正スベシ、

と記されて居る。

全國の高等學校中、その沿革の最も古いものは、第一と第三であり、中にも一高は、大學豫備門時代から數へると、文字通りに第一たるの資格があつた。而して本校が、創立當時、形式内容ともに一高と相通ずるものがあつたのは、前にも記した通り、野村校長が一高(一中)から轉任したこと、秋月教授も亦、以前一高(一中)に勤務して居たことなどが、その主な原因であつたらう。故に、他の凡ての事が細大となく相談會に附議決定されたのに、帽章の文字は別として、柏と橄欖を組合せることは、殆ど先決的のものではなかつたらうか。

創立當初、帽章が何を意味するかは、誰にも熟知されて居た筈なのに、學校にも、龍南會雜誌にも、何等の記録もなく、時とともに忘れて了つたものと見えて、大正三年になつて、一高宛てその由來を照會した時の回答を、五十年史編纂の折に發見して、今更の感を深くしたものである。

本月四日付ヲ以テ生徒帽章ノ儀ニ付御照會之趣了承右ハ當校ニ於テモ柏葉及橄欖葉ノ帽章ヲ相用ヒ居リ候而シテ右兩葉ヲ採擇セシ意味ハ別紙之通りニ候間御了知相成度此段及御回答候也

大正三年十二月四日

橄欖ハミネーヴァノ神ノ象徵ニシテ智(文)ヲアラハシ柏ハマルスノ神ノ象徵ニシテ勇(武)ヲアラハスモノ要スルニ文武ヲ象レルモノ

註

「五高」の校名は、創立當時に選ることは、明治二十年九月二十一日の「紫雲新報」に、「先月來上京中の野村校長は、新に五高教授に任命された海軍教授五位高須祿郎氏と同道にて着熊せり」とあることでも知られる。但、十月二十六日の同紙上に、「第五高等中學校の帽章は、第一高等中學校と同じく、菊桐の中に「五高」の二字を記入する筈なれども、未だ確定には至らず。」とあるが、一高も最初は皇室の御紋章ともおぼしき菊と桐を選んだものかどうか、疑はしい。

補註

先日、わざわざ、東京大學一般教養學部に赴いて、尋ねて見たが、菊桐のことは聞いたこともないらしい。「第一高等學校六十年史」にも、明治十九年五月十二日の項に、「生徒帽子の徽章を制定す。即ち橄欖の上に柏三葉を交叉し、その中央の圓内に「一中」の文字を入れしものなり。柏葉は希臘羅馬に於て至大至高の力を有すと思惟せられしユビテルの子軍神マルスの表式にして、橄欖は同じくユビテルの子知識と美術の神なるミネルヴァの標章なり。即ちこれ有文事者必有武備(論語―筆者)の精神を象徵せるもの、その理想窮知するに足るべし。」と記されて居る。而してその「一中」の二字は、注意すべきであらう。(十二月一日)而して「あゝ玉杯に花うけて、緑酒に月の影宿し、……」や「緑もぞ濃き柏葉の、陰を今宵の宿りにて、……橄欖の花雫すよ、花の甘汁われ吸へば、……」の一高の寮歌は、會て感激を以て一般に歌はれ、天下を風靡するの概があつたことも、恐らく六十歳以上の人々の知る所であらう。然り而して、大正三年と云へば、筆者の三年級の時分なのに、此の事に關しては、何等の印象も残つて居ないのは、どうした事だらうか。尤も、文武の象徵位は、聞いて居たに相違ない。

白線は、恐らく舊制高等學校の共通となつて居たと思ふが、必ずしも三條と限つては居なかつたやうだ。五高に於ては、

本科、豫科、補充と分れて居た頃、本科は三條、豫科は二條、補充科は一條、と區別されて居たのが、補充科がなくなり、本科と豫科とは合して大學豫科となつては、條數に區別を立てる意味もなくなり、遂に三條だけとなつたものである。從つて、本科・豫科等の區別がなくなつた以後に設けられた高等學校では、三條の必要もなく、さればと云つて、一條では何となく寂しさを感じるので二條にしたものもあり、一高の如く、初めから補充科はなかつたので、二條と一條にしたものもある。角帽は別として、丸帽に於ける白線の二條乃至三條は、全國の學校中、最も特徴があり、又、最も品格があるやうに感じられたのは、私一人の慾目からだらうか。

註

第一高等學校六十年史の九九頁に、「明治十九年五月十二日、柏葉橄欖の帽章制定せられ、正帽は同五月二十日從來の豫備門角帽を用ふることに定められしも、同九月十五日丸形に改められたり。二十一年九月十五日には從來本科生白線二條、豫科生同一條なりしを改めて等しく共に二條となし、襟章を定め、制服を背廣形と制定せられたり。云々」と記されて居る。

◇ — ◇ — ◇

井上文相の理想は、種種の事情で、實現されず學制改革の問題が起つて來たと云へ、年齢短縮の意圖は、その後次第に實現しつつ今日に及んで居ることを思ふ時、吾人は、その識見抱負に對して、滿腔の敬意を表せざるを得ないのである。二十七年五月二十五日發行の龍南會雜誌(以下、雜誌と略記)にも、「井上文部大臣の巡同」、「井上文部大臣の工業論」等と題して、大いに賛意を示し、その實施を期待して居る。

而して森文部大臣は、二十二年二月十一日、憲法發布の日に、不慮の災厄に遭つて此の世を去り、井上文部大臣は、宿痾と闘つて、ひたすら學制改革の實績に力めつつ、二十七年八月二十九日を以て職を辭し、翌年三月十五日、從容として

世に即いた。而して森文相の場合は、學校長の名を以て、職員一同、三日間喪章をつけるやうに申し渡し、文武朝野の各方面を慇懃して、同月十六日、葬儀の日を卜して、小峰の陸軍墓地に於て、嚴肅なる遙拜式を舉行し、生徒代表も、祭詞を讀んで居る。井上前文相の際は、公式の行事こそなかつたにせよ、雜誌第三十五號に於て、「前文部大臣井上毅子薨去」と題して、敬弔の意を表して居る。龍南人が、歴代の文部大臣に對して弔意を現したのは、恐らくこの二人だけだつたらう。

## 【參考】

日本の nationality は誰が見ても大切である。英語の知識位と交換の出来る筈のものではない。従つて國家生存の基礎が堅固になるにつれて、以上の様な教育は自然勢ひを失ふべきが至當で、あらゆる學問を英語の教科書でやるのは、日本では學問をした人がないから已むを得ないと云ふ事に歸着する。學問普及といふ點から考へると、矢張り生れてから使ひ慣れてゐる日本語を用ゐるに越した事はない。

是が自然の大勢であるが、余の見る所では、過去の日本に於て最著しく人爲的に英語の力を衰へしめた原因がある。それは確か故井上毅氏が文相時代の事であつたと思ふが、英語の教授以外には、出来る丈日本語を用ゐて、日本の language に重かしむると同時に、國語漢文を復興せしめた事がある。云云。(明治四十四年一月、二月『學生』—初版漱石全集、別冊節錄)

既にして、第三高等學校は、大學豫科が廢されて、本校へも約六十名が轉校し、又、鹿兒島高等學校造士館は、文部省の所管を解かれて廢校となり、そのため、五十六人の轉校を見るに至り、その結果は、龍南の風物にも可なりの影響があつたことが想像される。



日清戰爭(明治二十七年八月一日、宣戰、)は、國を擧げて大國と戰つただけ、青年子弟にも相當緊張味があつたばかりでなく、

風雲奮ならぬ影響は、既にその以前より現れて居る。而して戦後の十年間は、所謂臥薪嘗膽の時であつたとは云へ、國民一般の風氣の上にも、可なりの隆替があつたやうだ。今、その前年に遡つて、二三の例を示せば、二十六年十二月二十日發行の雜誌第二十一號に據ると、この年の行軍に就いて、左の如く記して居る。

到る處歡迎如何に鄭重なりしよ、到る處の江山如何に秀麗なりしよ、今回の一行、校威を四州の要樞に伸張し得、天下の名社に賽し、天下の名山水を踏むを得たり、歸來胸懷殆んど昔日のものにあらざるを覺ふ、特に、吾人行軍中、校長以下諸先生、每事生徒と勞苦を分たれたるを感謝す、今や天下到る處師弟反目の風ありと聞く、吾人は、寒村銃を枕にして寝ね、早起霜風の峭峭たるを衝いて發するとき、顧みて諸先生の吾人へ親しきを見る毎に、吾人は、一團の春風來りて吾面を拂ふを覺えずんばあらず、

一讀、眞に欣懷に堪へないものがある。又、『豐筑修學旅行日誌』の一節を引けば、

十時、(十一月六日—筆者) 全員練兵場に整列し、沼田大尉指揮して隊伍を部署す、(中略) 部署已に定まる、中川校長乃ち進み出で、告げて曰く、夫れ修學旅行は、一種の課業なり、其地理歴史博物其他百般の學術上、大益あるは固より論を俟たず、然れども此行を以て行軍と通稱する所以は、一の規律を守ること一、艱難辛苦に堪ゆること一、氣質鍛鍊を實習することの三點を嚴守せしむるにあり、されば諸子は行軍中終始、沼田監督の命を奉じ、敢て或は背くこと勿れ、嚴正の舉動を失はず、以て我校の名聲を發揚せよ、飲酒する勿れ、買喰する勿れ、以て大に費用を節せよ、告示終る、乃ち晝餐を喫し、十一時嚴令一發、行を啓く、喇叭囑咐校門を出づ、豪氣堂々、歩々正々、又光白日に映じて光閃々、劍戟相磨して響鏘々、(中略) 教職員生徒凡て二百五十餘名、(二十六年の生徒數は) 四百四人、(筆者註) 云云

以て當時の意氣を想見すべく、殊に、『買喰する勿れ云云』の一語に至つては、洵に隔世の感があり、武夫原を練兵場と

云つて居るのも、世相の一端であらう。

かくて、その日は大津一泊。七日、阿蘇下野原に於て演習、後、矢津助教の地質學講話。坊中一泊、小學生歡迎。八日、宮地にて、烟花を揚げての歡迎を受け、竹田一泊、途中雨。九日、野津原を経て大分藩、中學校に於て歡迎會。一泊。十一日、別府一泊。十二日、日出を経て、宇佐一泊。十三日、千源原に於て演習、中津一泊。十四日、耶馬溪探勝、矢津氏講話。十五日、中津より豊津へ、一泊、烟火、緑門、全町の歡迎。十六日、大隈町一泊、途中雨。十七日、秋月町を経て甘木一泊。十八日、久留米の明善校に於て歡迎會。前年熊本まで開通した汽車に乗つて、無事歸熊して居る。(二十三年、二十四年、二十五年の旅に就いては、五十年史の「修學旅行より野外演習まで」の項參看)

然るに、翌二十七年三月九日に舉行された、兩陛下大婚二十五年奉祝の際の如きも、式後、體操場、後の武夫原に於て、全員を分つて四隊と爲し、一百の銃口、一齊に四十二發の祝砲を放つた後、食堂に於て、祝杯を舉げた。同夜の提灯行列に就いても、

四百の球燈は綺羅星の如く輝き、四個の大きな高張提灯は、各中隊の眞先に打立てられて進み行けり、校長以下教職員諸先生も總て行列中の人なりき、「春の彌生は今宵しも」城中くまなき賑ひの中を肅然魚貫して祝歌(黒本教授作歌)高らかに「八十の衢」を歌ひ巡り、九時漸く校門に歸れば、轟然一聲、爆竹は一行の壯舉を迎へたり(中略)校に還りて少時休憩の後、雨天體操場に入りて祝宴を開けり(中略)幕を排して肅然現れ出でたる五人の武士、ここは病室生徒の劍舞なりき、

と記して居る。提灯行列は、熊本に於ける最初の催しで、龍南風物史の一齣とも謂ふべきであらう。而してその後、學問の衝突、鴻門の會、開國始末、妖怪退治、劍舞、各國人、宇治川先陣、狂言、謠曲、劍舞等の餘興に打興じた有様が、眼

前に髣髴するやうである。故に記者は、

嗚呼是れ千載の一遇、無上の大典、また無上の盛事なかるべからず、龍南當日の盛況、其萬一を録すれば大凡右の如くなりき。

と結んで居る。

尙、同年五月二十七日、書記永井孝一氏の永眠に際し、翌二十八日午後營まれた、坪井見性寺に於ける葬儀には、午後臨時休業して、職員生徒一同會葬し、龍南會も香典を供へ、各部の練習を休んで弔意を表したことや、六月八日、雨天體操場に於て、故平山校長の三年祭を行ったことなども、龍南美風の一面と稱すべきである。

◇ — ◇ — ◇

然るに、同年七月十日の卒業式に於て、中川校長は、「學事報告」として、生徒現員三百九十九人、内、本科生は、卒業生四十二人を加へて一百六人、豫科生二百六十人、補充科生三十三人、入學者七十九人、内、他の高等中學校より轉學した者十人、願に依り退學した者四十九人、除名二人、死亡者三人等の數を挙げた後、來學年には、全く補充科を廢して、本科一年以下の各級に、若干名を募集するが、その志願者百餘名、而して區域内の卒業生にして、無試験入學者凡て七十餘名、第三高等中學校より轉校する者、本科・豫科併せて凡そ六十人、又、該校設置所屬の、兵庫・島根・愛媛・高知・香川の各縣尋常中學校も、本校區域となつたので、生徒も二百名くらゐ増加の見込、又、本科第二部に、農科を加へて、既に本學年より實施したこと、教員は、教授十三人、助教教授六人、囑託教員四人、雇教員一人、外國人教師一人、凡て二十五人、卒業生四十二人中、入學試験に合格した者二十三人、他の高等中學校より轉學した者四人、本校區域内の各尋常中學校卒業生にして、無試験入學者十八人などと詳報して居るやうに、本校も、次第に複雑性を加へて來たので、同年九月

の入學式に於て、學校長は、我が校固有の校風として、「禮儀を重んずること」、「武勇の氣象に富めること」、「儉樸質素を守ること」、「廉恥を貴ぶこと」、「國家的觀念に富めること」などを列擧して、訓告して居るのである。

第一回戰勝祝賀式は、二十七年九月二十九日、雨天體操場に於て催されたが、十一月二十一日には、旅順港も陥落し、翌二十八年二月二日には、威海衛の堅壘も、遂に我が軍の手に歸したので、二月十一日、紀元節の午後三時より、第三回戰勝祝賀式が行はれた。雜誌第三十四號には、

秋月先生起て舞ひ、中川學校長朗吟す、拍手歡呼哄然天に震ふ、飲む者あり、喰ふ者あり、歌ふ者あり、舞ふ者あり、午后五時に及びて漸く散會せり。

と報じて居る。且又、西森・大峰・武藤三名の傭人が、第一補充員として應召出征したので、老親妻子の窮狀に同情して、「衆皆金を捐て之を救恤し、以て出征者をして後顧の患なからしめたる」が如きも、龍南學徒の美譽と稱すべきである。かかる間に、本校に於ては、二十八年五月二十七日、擊劍及柔道の二科が、體操副科に加へられ、やがて、その實施を見るに至つた。而して同年十月十日の第五回開校記念會も、極めて盛大に行はれたが、二十九年一月四日發行の雜誌には、「最後に生徒一同祝歌を唱ふ。聲韻悠揚、滿場、爲に震ふ。是に式終り、云云」と記し、文苑欄には、

#### 第五高等學校開校紀念の歌

助教授 園 哲雄

阿蘇の峰より いや高き

君が御蔭に 立初めし

學びどころの さかえゆく

その本つ日を ことほぎて

本にむくいん 眞心の

あかきはやがて 日の本の

光ともなり 大君の

御稜威やち代に かがやかむ

の歌詞を載せて居る。而して作曲者は不明である。

この年、學校長の名を以て、熊本縣警察部長宛、

當校近傍ニ於ケル芝居見世物等ノ興行ハ生徒ノ教育上頻ル迷惑ヲ感ジ候儀ニ有之候條自今飽田郡黒髮町藥園町以東ノ地

ニ於テ右等ノ興行願出候節ハ可成御許可可無之様御注意相成候儀ハ難叶哉此段及御協議候也

の公文を出して居るのは、洵に多とすべく、今昔の感に堪へないものがある。

◇ — ◇ — ◇

二十八年十二月一日より催された兎狩も、壯舉であつた。斯の日、東山組は第一及第二の二手になり、前日、阿蘇郡錦野村に泊り、西山組は、當日午前二時半、校門を出たが、東山組は各約四十名、西山組は約七十名で、東山第一組は兎五頭、第二組は兎四頭と山鳥一羽、西山組は兎七頭の獲物があり、翌日午後、雨天體操場に於ける矢、開も亦、愉快の一語に盡きるやうだ。而して又、同月十六・八の兩日には武夫原に於て、丁寧なる武裝検査があり、終つて、分列式が行はれた。同誌には、「眞にこれ風紀上、平生の苦心を表彰し、且將來に偉大の効果を收むる良法に非ずして何ぞ」と書いて居る。

註

町村名は、凡て舊に依り、改正後の現名は、調査しなかった。

二十九年四月十七日には、自今副科を正科に準ぜしむべき由を掲示したが、その年の寒稽古の如き、「瑞邦館裡顛倒の響高く、體操場内憂々の音急なり。出席者常に百五十名に上るに至りては、亦盛なりといはざるべけんや」の記事も頼もしく、修學旅行記事に於て、

晨光決滌、紅曦未だ升らず、萬籟靜寂、曉夢正に濃なり、倏ち聽く本部（原、邦）樓上、一昂一低、一緩一急、吟聲錯綜して頻に起るあるを、蓋し諸先生の合唱なり、健兒驚き覺めて、元氣愈々振ひ、蹶起<sup>ふたまたま</sup>衾を蹴て戎裝を整ふ。」の記事も痛快である。

——◇——◇——

然るに、他の一面に於ては、餘り芳しくないことも少くなかつたやうだ。即ち、この年、校則の一部並に倫理講筵の改正を見たのがそれである。先づ、校則の改正に就いては、第三學期の試業を全廢し、第一學期の試業に缺席した者には、第二學期試業の得點の二分の一を與へ、第二學期の試業に缺席した者には、第一學期試業の得點の二分の一を與へることとなり、無届缺席者には、從來監督教官より注意を與へ、なほ憐めないで、同一の所行二回に及ぶ時は、校則第五章第十八條に照して、學校長が戒飭を加へ、而もなほ憐めずして、三回以上に及ぶ時は、同規則に依り、事情に従つてそれぞれ處罰して居たのを、次に述べる。倫理科よりは、減點ことを止め、その他に於ては、無届一回五點、二回七點、三回十點、四回十五點、五回二十點、以上一回毎に五點を累加すること、但、歸省等の爲に、連續數日に互る時は、之を一回と見做すことになつたのである。

次に、倫理科<sup>註</sup>に關しては、在來の倫理が、動もすればその本來の面目を失して、成績に拘泥せしめる傾向があつたので、この際大いに改革して、各年級を合して、毎週一回、瑞邦館に於て講筵が開れることになつたことを云ふ。

而して此の無届缺席の減點と云ひ、倫理講筵の改正と云ひ、之を大にしては、戰勝の氣分に酔うた國民精神の弛緩であり、之を小にしては、青年子弟の墮風の然らしめた結果であると斷ぜるを得ない。吾が校に在りては、その事例を次の宣誓式の實施に於て見出すのであるが、それも、決して率然として起つたものでなく、二十九年二月十日に掲示された、紀元節・天長節・入學式・紀念式・招魂祭參拜・武裝検査・野外演習等の際に於ける、無届缺席者への戒告や、中川校長の演説や、その他雜誌中の記事にも、その片鱗が現れて居るのである。

（前略）「諸子は此險惡なる風潮の下に立つて之に動かされることなく、確乎として進まざる可からず、……」と吾人の本分を示され、進んで我校の特長を擧げ、「益々これを發揮して日本學生の模範と仰がれ、標準と推さるる様一層奮發する所なかる可からず。」と勵（ま）し、校長の在京中、龍南同窓會に臨まれしが、其席に於ても、五高の特風を、維持すべきよし望まれしを言ひ……と誇られ、話頭一轉、近頃缺席者増加したり、若し放逸に傾きたりとすれば、恐るべき兆候にあらずや」と注意せられ、「修學上不便のことあらば、遠慮なく申出らるゝは差支なければ、斯る不勉強の形跡を止めざる様、諸子相戒めて我言を實行あらむを希望す。」とて満場肅たる間に壇を降られたり。

織塵も拂はざれば五嶽將に成り、清水も停めざれば四海將に盈（ち）んとす。今この針砭<sup>しんぺん</sup>を賜はる、吾人豈に刻心鏤骨服膺せずして可ならんや。（三〇、六、二九、第五十八號雜報）

その語るや切實、その聽くや眞摯、と謂ふべきである。次に、中川校長の訓告を裏書きする一二の記事を擧げると、このごろ着帽着袴の事案れたりといふべし。（中略）事些事に似たりと雖、學生の品位を持するに於て、寧ろ等閑に附す



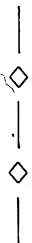
べき。諸君願(は)くは猛省ありて可なり。(三〇、三、三〇、第五十五號雜報、「近事片々」)

雖然半千に超ゆる學徒を容して咸く之を誘披し指導せんと欲す、從ひ(て)當局の篤志を以てすと雖、事或は志と相從はざる者あらん、本學年に於ける放校の多數、以て見るべき也、(中略)六七月の交、腕車を連ねて南に馳する者多きを以て見るべからずや。(三一、五、二〇、第六十五號雜報)

以上は、日清戰役當時、並にその後兩三年間に於ける、參考資料の幾分を擧げたに過ぎず、又、斷じて吾が校のみの事でないのは申すまでもないが、何れにしても、戰後、社會人心の動搖は、わが龍南の校風にも、少なからぬ影響を及ぼしたことが知られると共に、宣誓式舉行の前奏曲とも見ることが出来る。

## 註

本校に於ては、前期の嘉納校長や秋月教授のところでも一言して置いたが、新進氣鋭の新校長も、溫容謹嚴の老教授も、ともに全校の信望を鳩めて居り、學問と體験が、青年學徒の感銘を深うした所以と考へる。筆者在校當時も、瑞邦館に於て、巧みにエスケープした連中もあつたが、西洋史專攻で、端的に自讀のことまで言及する底の由比教頭や、社會學專攻で、アリストレスの古代哲學から、赤きもの少しは參れ蕃椒(漱石)で、ゴリキイまで談じ去る江部教授の講話には、耳を傾ける者も少くなかつた。一高でも、前輩の某某東大教授を煩はして居たやうだが、比較的成功的なのは、大島(正徳)東大助教授だと聞いて居たことがある。柔道もやり、何處となく、由比教頭に似たその風格が、學殖を超えて青年心理にマッチした爲であらう。



二十八年を以て、端艇會の成立を見た本校には、翌年の早春、新艇の進水式も行はれ、三十年の春には、第二回の端艇

會が催された。その夏、佐世保鎮守府より日清役の戦利品である鎮遠號艦載のカッター二艘を譲り受けることになり、修理の上、「旅順」と「大連」と命名、八月四日、無事江津湖上にその姿を現した。

廻漕の際には、握飯二籠、菓子類四箱、梨及鶏卵數十箇、寶丹數袋、飲料水十餘瓶、照前燈四箇、蠟燭數本などを準備し、本校生徒十六名の外、元本校生徒一名、攻玉社生徒一名、濟々齋生徒五名、數學院及鵬翼舍生徒五名、凡て三十名の青年學徒が、非常な意氣込みを以て、遙く漕いで來たと云ふことである。

ところで、その前年四月十四日付を以て、赴任したばかりの夏目教授(七月九日まででは講師)は、間もなく龍南會の端艇部長を依囑された。偶々龍南武勇傳中の一人吉田久太郎氏(他の一人の相手は、日露戰爭當時、北滿に於て勇名を轟かし、沖・横川と並び稱せられた沖禎介氏)が、その指揮者と爲り、大任は果したが、その爲に百圓―少く見積つても今の七・八萬圓?―近くの赤字を出して、さしもの勇士もほとほと困つて居た時、その事を耳にした教授は、平然とそれを償つてやり、責任を感じて部長を辭したと傳へられて居る。念の爲に記せば、夏目教授の初任俸給は、月額百圓であつた。かくてその二艘は、その後永らく異容を湖上に留め、筆者入學の頃は、漕艇の折にも使用されて居たが、何時の間にかな姿を消してしまつた。それが大正二年度の龍南會新委員の選舉場瑞邦館に於て、表面化して大問題となり、遂に會長の問責まで激昂したことを筆者は目撃したことがある。蓋し、龍南祕話の一つであらう。(同年三月十五日發行の雜誌「龍南の春は未だ來らず」、「吾人の見たる端艇事件」参照)

## 註

どちらかと云へば運動は比較的好きの方であつたが、その運動も身體が虛弱であつた爲め、規則正しい運動を努めてやつたといふのではない。唯遊んだといふ方に過ぎないが、端艇競漕などは先づ好んでやつた方であらう。私は好きでやつたと云つても、

チャンピオンなどには如何してもなれなかつた。

(明治四十二年一月『中學世界』—初版漱石全集別冊)

學校令は、三十三年八月四日を以て改正され、高等學校の學科課程にも、相當の改革が行はれ、上田(萬年)専門學務局長より、三十四年五月二十八日付、專甲五六九號を以て、高等學校入學志願者の中學卒業者に對しては、卒業後經過の年數に制限を設けざる旨の通牒があつた。

本校に於ては、三十三年、評議員假規程並に教授會規程を設け、三十六年度からは、所謂赤丸の發表も始められた。

今日第一學期評點六十未満ノモノニ限り朱印ヲ以テ發表候ニ就テハ御受持科目ノ評點特ニ劣等ノ生徒即チ五十點未満ノ者ニ對シテハ便宜十分ニ御訓告相成候様致度尙ホ今後評點又ハ成績發表ノ際モ右同様ト御了知相成度過般ノ教員會議ノ精神ニ基キ此段得貴意候也

一月十三日

渡邊教頭

既述の通り、二十七年、第三高等學校には、法・醫・工の三學部のみに留めて、純然たる専門的教育機關と爲し、舊豫科生は、第四・第五の二校に分配され、第一・第二・第四・第五の高等學校に於ては、それぞれ醫學部及び大學豫科が併置された。然るに、その結果、高等中學校設置區域の存在は、その意義を有しなくなつたので、二十九年六月には、來る三十四年四月以降、該設置區域に依らざる儀と心得べき旨の訓令が發せられ、二十九年七月には、舊豫科を全廢するに至り、吾が校には、三十年四月十七日、文部省令第六號を以て、二十七年の勅令第七十五號高等學校令第七條に依り、修業年限四箇年の工學部が設置され、同年七月、本校教授櫻井房記氏が、同主事を命ぜられ、茲に本校部と二學部から成る、

全國特有の高等學校となつたのである。而してその工學部に關しても、醫學部と同様に、五十年史に護ることとした。

龍南の歴史に於て、特筆すべき事の一つは、三十三年櫻井教授が學校長昇任以降實施された、禁酒の勵行と入學式の宣誓であらう。この畫期的な禁酒令は、二十三年二月新任以來、十年の經歷を積んだ櫻井校長の熟慮斷行であつたとは云へ、然るべき充分の理由があつたやうだ。例へば三十三年九月十二日の入學式に爲された校長の訓話を以て、その間の消息を知ることが出来る。今、同年七月發行の第八十一號の「入學式に於ける櫻井校長の訓告」に就いて見るに、

本校は自今學生の飲酒は止めさせる方針である。尤も規則を以て之を禁ずるのではない。斷然酒を飲まぬと云ふ決心を促し、諸子自からの弊害を悟り、斷然酒を飲まぬと云ふ決心をして貰ひたいのである。(中略)或は政府は法令を以て、學生の飲酒を禁ずることがないとも限らぬ。又學校も規則で禁酒を命ずる場合があるかも知れない。(中略)諸氏は、此際、決然飲酒を止むるがよろしい。而して此の如き規則を出す必要のない様にして貰ひたい。云云と記されて居るのは、固より雜誌部員の筆録に係るものであるが、大體に於て、間違ひはないと察せられる。

然るに、同年十二月には、學校名を以て、生徒の禁酒に關し、父兄又は保證人に通告した案文があり、又、翌三十四年二月には、豫め中學校宛にも、その旨諒解を要めて居る。用意周到と申すべきであらう。

かくて、九月十二日の入學式には、初めて新入生徒總代に宣誓文を朗讀させ、新入生徒には、各自宣誓簿に署名の上退場したばかりでなく、十三日より二十一日まで、學校長の引見まで行つて居る。而してこの署名だけは、筆者も經驗があるが、引見は、四十四年まで實行したことが、庶務課日誌に錄されて居る。

宣誓書

- 一 校規并ニ示達ヲ確守シ師長ノ訓諭ヲ服膺スル事
- 一 苟モ學生ノ體面ヲ汚スカ如キ行爲ヲナサ、ル事
- 一 猥ニ退學ヲナサ、ル事
- 一 在學中ハ決シテ飲酒セサル事

生等謹ミテ右ノ條項ヲ遵守シ決シテ違背セサランコトヲ誓フ依テ茲ニ姓名ヲ自記ス

明治三十四年九月十二日

——◇——◇——  
宣誓施行前後の記事には、左の如き露骨なものがある。

通町邊、帽を被らず、袴を着せずして、夕暮軒下を通ひ行ものは如何なる生徒か、紺屋町上、獵帽「ステッキ」を携へ、黄八丈の下着に、黒紋付の羽織を着し、三々五々揚々として南下するものは何處產の如何なる俱樂部を有するものに多きか。(三三、二、二八、第七十七號雜誌、風聞錄)

今や吾人寮内諸賢の歌謠を聞くに及んで、亦等しく吾校に不健全なる空氣の輸入せられたる無きかを恐る、なり。(三三、五、五、第七十八號雜報、自炊記念日)

新入生の態度 新入生諸君の、生徒課に出入する態度を見るに、脱帽するもの甚だ少なく、甚だしきは濡手拭を肩に引掛け、聞くに堪へざる俗謠を唱へ、恰も元祿時代に於ける俠客の出來損ひ然たる風態にて、平然として去來せるを認む。吾人は之を遺憾とす。思ふにこれも新入生のみを一緒に集めたる爲め、自然上級生の感化が及ばざる結果にあらざるか。(三四、一一、二四)

銀縁眼鏡に華麗の服を着、銀鎖をぶら下げて好みもせぬシガーを薫らし、宛然紳士否當世才士を氣取る痴漢はなきか。(中略)故意に酒杯を手にして兩肩を怒らし、羈氣復すべしと誤解せる暗愚者はなきか。(中略)奮起せよ諸君、我龍南會の(原、や)演說部や雜誌部は、實に此弊風を矯正し、醜類を制裁すべき好機關に非ずや、(中略)何ぞ速に諤々の文を草して、龍南の天地を一新し、眞に涼風颯々新綠滴る許りの樂境となさざるか。(三五、七、一、第九十三號雜報、弊風を矯正せよ)

近來龍南の學風を論するもの多く、従つてまた寮生一般の氣風を議する也多し。苟くも今日の如き道義的頹廢を看破したる憂慮の士が斯く論じ、斯く議するは、これ吾等寮生の大に幸福とす所なり。(三六、五、二五、第九十九號雜報)

——◇——◇——

その實施は、ほんの一次的ではあつたが、三十四年度以降は、中學卒業滿三年を経過した者には、入學を許さないこと

になつたのも、又、文科に於て、地理・動物及植物を省いて、法學通論を加へ、各部を通じて、外國語の時間を増したのも、文部當局に於て、深く時勢を考慮した結果であると考へられる。

ともあれ、理想の下、宣誓を施行し、禁酒を勵行しても、溶溶たる社會の風潮に拮抗し、浸潤せる積年の弊風を掃蕩することは出来なかつたやうだ。さりながら、龍南會雜誌に、端的な批判があるからと云つて、當時を龍南の頽廢時代と難することは、固より皮相の見であり、中には魁磊骨硬、沈正不同等の人士があつたのは云ふまでもなく、墮落を歎き、低調を諷る意圖も亦、之を多としなければならぬ。既にして、日露の風雲急を告げ、遂に砲陣の間に相見えるやうになつては、期せずして舉國一致の實は揚り、吾が龍南の天地にも、頼もしき青年の意氣が發揚するに至つた。

◇ — ◇ — ◇

廣東に派遣された清朝の欽差大臣林則徐が、英人所有の阿片を燒却したことを直接の原因とする、阿片戦争の南京條約（一八四四年）や、英國汽船アロー號の天津條約（一八五八年）等の結果、英・米・佛・露の極東進出は、餘りに顯著な事實である。而してロシアが、夙望達成の過程として、鴨綠江森林會社の西北部朝鮮に勢力を扶植しようとしたのは、吾が國の權威を侵略するものであり、三十六年八月十二日、わが國より提議した協商條約は、ロシアの容れる所とならず、三十七年二月六日、遂に國交は斷絶し、二月八日には、吾が艦艇の旅順港口襲撃となり、二月十日には、宣戰布告が發せられた。當時に於ける國民の覺悟は、日清戰役の時に比して、蓋し想像以上であつたことを、斷言するに憚らないのである。同年二月二十日發行の雜誌第百四號の雜報「龍南だより」には、

今や帝國は千載一遇の好機に際會し、國民の意氣頗る昂れるを見候。而かも眞正に帝國の運命を決すべきは御互の任に候はずや、己を修（原、治）め人を治むるの道は各自の修養に待たざるべからずしていふまでもなく教場は主に記憶

（原、臆）の練習所、智德に於て多く與へざれば、龍南會は幾分此缺を補はんとする者、會員一同充分各部を利用してお互に得る所あらんことを期し居り候、希（は）くは諸兄も居る所に於てベストを盡し邦家のため學界のため大（い）に自愛せられんことを祈申候。

の記事があり、又、三月十三日發行第百五號の雜報「紀元節」には、

忠勇譽れ高き大和魂、精銳較びなき日本刀、四方の醜草幾くか其横蔓を遑うし得べき。金鵄の光燦として日星の如し。

嗚呼明治三十七年の紀元節、青史は永しへに此の日を記せん、茲に謹んで之を祝す、

と結んで居る。而して斯の年七月十一日、天皇陛下は、東京帝國大學に於て、

軍國多事ノ際ト雖モ教育ノ事ハ忽ニスヘカラス其局ニ當ル者克ク勵精セヨ

との優渥なる御沙汰を下されたのである。

同年十月二十八日發行第百七號の雜報「新入生諸君を迎ふ」の一節に、

今の状態は何ぞ不得要領なるや。分髪截然としてコスメの色鮮かに、天下の粹士乃公に非ずんばと氣取り玉へるもあれば、悄然として力なき哉、帽は鳥打、帶は縮緬、ひよろ／＼として街衢にうろつき玉ふもあり、靴は何とやらの別仕立、洋服はその光澤よきものならではと、朝夕氣揉み玉ふは何處の方ぞ。（中略）今や誠にこれ校風の危機也、過渡期也。

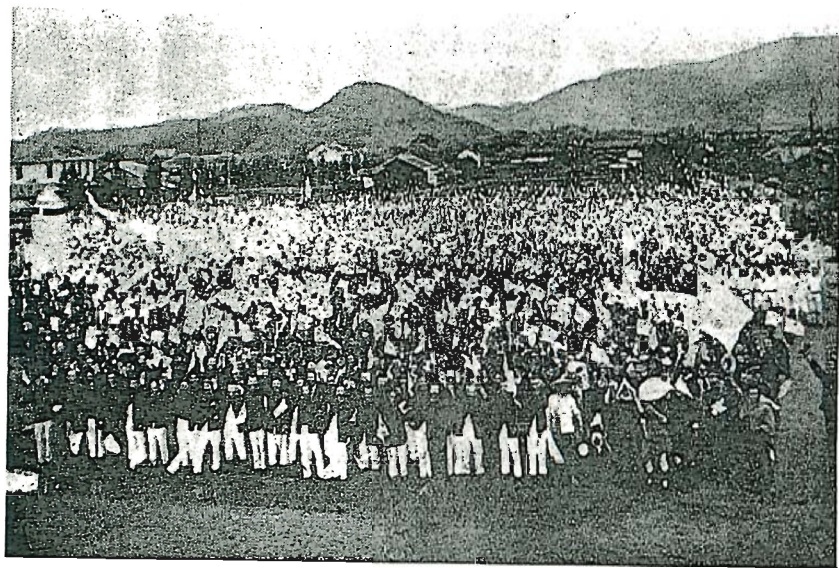
決して我剛（原、豪）毅と謙讓とを標榜して立つべき五高校風の本然の性質に非ず。あらゆる諸子の覺悟を要求せむとするは、即諸子が總て皆超然として、今の三二年生によりて形成せられたる、と云ふよりも、寧ろ、雜然として外形を成すに足らざる今の校風以外に特立して、更に五高本來の校風を探り、自己の責任を自覺せられむことこれ也。（中略）五高よ、白三筋の帽章よ、汝が責任の如何に大なるかを顧みよ、吾人は大聲、剛毅と木訥（原、豪毅と朴訥）とを呼號

して止まざると共に、斷々乎として彼ハイカラなる奴原を排斥す、云云

とあるが如き慷慨や、同年十一月三十日發行第百八號に於けるクラス會の批評の如きは、年來の情勢に對抗しようとする、時代の反映と見るのは、果して誤れる獨斷だらうか。而して十月三十日には、櫻井本校校長、小柳師範學校校長、井芹濟々巒校長、及、野田熊本中學校校長等協議の結果、熊本學生講武會なるものの出現を見、同日その發會式を兼ねて、第一回演武大會が、本校に於て催されたのである。

三十八年一月元旦、金城鐵壁と誇つて居た旅順の堅壘も、遂に陥落した。仍つてわが校に於ても、十一日午前九時よりその祝賀式を行ひ、續いて隊伍を整へ、職員とともに花岡山に赴いて、大元帥陛下陸海軍萬歳を三唱、歸途、第六師團司令部に赴いて、陸軍萬歳を祝し、隊伍のまま歸校した。

國を擧げて憂慮的となつて居たバルチック艦隊も、五月二十七日、殆ど潰滅に歸した。是に於てか、六月二日、日本海海戰祝



賀式を擧げ、教員生徒一同、山崎新市街に出かけて、大いに祝意を表した。(實情) 而してわが校より出征した、二宮哲三・早崎勸の二教授、島野四平・横田五郎の二助教授、囑託教員宇野親時、書記蒲池玄造、雇島田正彦、同山田山、前體操教師前田肇、同田添正人の諸氏に對する激勵慰問や、三十九年三月三日、第六師團司令部以下凱旋將兵の歡迎、四月五・六兩日、渡鹿練兵場に於ける臨時招魂祭參拜の如きは、更めて記すまでもなく、國民として當然のことであつた。

戰勝が、龍南に齎らした好箇の記念は、寮歌「武夫原頭に」と「それ北韓の」であらう。殊に武夫原頭の如き、世間では、恰も五高の校歌でもあるかのやうに、親しみをもつて居る。校旗も、昭和六年に制定されたので、五十周年を記念して、校歌をとの意見も出たが、武夫原頭に比して、勝るとも劣らざるものは、到底出來まいと云ふので、遂に沙汰止みになつて了つたほどである。但、寮歌集や寮史には、「東京帝國大學寄贈之歌」と記してあるが、その實は、在學中の同窓有志が贈つたもので、誤解を避ける爲に、巻頭には、僧越ながら改めておいた。作者惠利武氏に就いては、五十年史上特に寫眞や筆蹟まで掲げた。折角のこと、作曲者の氏名をと思つて、その後も相當努力してみたが、結局わからなかつた。歌詞と氣脈相通するところ、一流の専門家でなくして、作者の親しい友人だらう、と云ふ説もある。或はさうかも知れない。

既にして、三十九年三月には、工學部が單立して、「熊本高等工業學校」と呼ばれ、街道を隔てて南に移轉し、十月には、龍南人の談り草となつて居る「轉校事件」が起つた。(雜誌第百十八號並に習學寮史參看) 四十年六月には、内實は兎も角、表面上は、禁酒條項も廢止された。而して同年一月九日には、櫻井校長の辭職と、松浦(寅三郎)校長の新任、



同月二十四日には、渡邊教頭・伊藤生徒監・高木教授の休職、二月二日には、由比教頭の來任、同月七日には、武藤教授の休職、十八日には、關教授の休職等、まことに慌しいものがあつたのは、轉校事件の餘波と見るべく、擔任教官の制度や、生徒監の増員なども、それと何等かの關係があつたに相違ない。

本校未會有の大事件に就いては、相當資料もあるが、當事者たちの話にも、徑庭があり、且又、故人に違つことにもなるので、茲には、興味本意に記す不謹慎を避ける。

要するに、一高生徒の飛機に依つて勃發した轉校問題は、同年三月二十八日の省令改正による、文部省の特別措置に對する憤慨もさることながら、多年に亘つて醗酵せる鬱憤を晴すこと、及、某某教官を排斥することを、その主要目的としたところの、該事件の導火線に過ぎなかつたものと、私は斷じたい。而して此の事件を以て、後述する昭和七年春に起つた、全校の盟休事件に比すれば、その範圍に於ても狭く、その日數に於ても短く、その方法に於ても單純であり、生徒側には、一人の犠牲者も出さなかつたことを忘れてはなるまい。

## 〔備考〕

此の事件は決して一時の好奇心から、死せる平和にあきたらず、平地に波瀾を捲き起さんが爲め、面白半分にやつたものではなかつた。學校の尊嚴を維持せんが爲め、剛毅本訥の精神をどこまでも明かにせんが爲め、天下の學生を輕視したる大臣の私權濫用を排せんとして、文部省を相手どつた男らしい大喧嘩であつた。（續寮史「栗野事件顛末」より）

四十一年十月十三日には、所謂「戊申詔書」を拜誦したのであるが、社會風教の頽廢は、固よりわが龍南の小天地のみではなかつた。即ち、「教育五十年史」第六章の第五期概説にも、

奢侈浮華の風を生じ、物質萬能主義に傾いた社會の中からは種々の思想が現れた。其の最も著しいものは自然主義唱道である。自然主義は先づ文藝上の思潮として現れ、文壇は一時殆ど自然主義派の獨占の姿を呈したが、此の風潮に反抗して反自然主義を唱へる者も出で、盛に自然主義を攻撃した。戦後に於ける宗教問題の一として論壇に奇觀を呈したのは、網島梁川の發表した所謂見神の實驗である。（中略）次に伊藤證信、河上肇等によつて唱道せられた無我の愛も當時の思想界に於ける一問題となつた。

と述べ、雜誌第百二十七號（四〇、一一、三）には、「謹むで聖詔を拜讀」と題して、

夫れ、一國の盛衰は青年の元氣に依る。青年の氣燃ゆる所、邦家榮え、青年の氣衰ふる所、國亡ぶ。淺薄なる個人主義に魅せられ、根柢なき社會主義に迷ひ、所謂自然主義に酔ひ、滔々として奢侈に染み、淫（原、姪）佚に溺れ、薄志弱行、氣衰へ熱冷め、一片邦家を憂ふるの念を見ざる、是れ邦家（原、下）青年の現狀にあらずや。

と記して居るのである。

日露戦争は、わが國をして一躍世界の一等國たらしめ、鮮滿に於ける權益は増大確認され、やがて日韓併合が實現して、東亞の盟主を以て自から任ずる「國力は、年とともに養はれて行つた。さりながら、わが國の世界的躍進は、やもすれば戦捷の氣分に酔ふとともに、又一面、歐米文化思想の流入を促進し、翻譯書は恰も雨後の筍の如く世に現れ、最も感受性に富める青年子弟を驅つて、その渦中に捲き込まねば止まない勢を示したのである。その一例を武夫原頭の歌に於て見出す。即ち、雜誌第十七號の「叟々錄（一）覺醒の時來れり」の題下に、

夕暮學寮の畔に追へば、高く秋風に嚙いて、龍南一道の正氣、以て二十世紀に光爛（原、瀾）を與へ、扶桑幾萬の青年に活力を與ふるに足れり、と歌ふ聲あるを聴く。嗚呼、咀ふべき哉この歌。汝の綺羅なる文字は校友を覺醒するにあら

ず、叱咤するにあらずして、校友の虚榮心に諂諛し、自負心を煽動する所のもの也。僕は直截に白す、今や、五高魂は何ぞや、と云ふが如き穿鑿はすでに無用に歸せり、何となれば、五高魂、五高校風、龍南正（原、生）氣と云ふが如きものは、すでに其存在を失ひたれば也。僕の露骨を責むること勿れ。今や、舞文曲筆にあらずして、飾り無き眞理を直言す可き時なれば也。云云

と武夫原頭を難じ、次項「校風管見」（二）には、

學校は、生徒の智徳を養成せんが爲に存在する事は、あまり明白なり。恐（ら）くこれに異議ある者はあらざるべし。或者は國家の要求に應ずべき有用の材を成すを以て目的とすべく、或者は個性の發展を以て目的とすべし、しかも未だ學校が外聞の爲に存在し、文部省の命令の爲に存在する説を聞かざるなり。（中略）煩悶、意氣銷沈、奢侈、社會主義、之が矯正、豈彼の風紀嚴肅と云ふ如き手輕なる事に依りて得べけむや。云云

と風紀取締を嘲り、次號雜報の「校風管見」（三）には、

「死せる平和」は、宗教家の間のみにあらざる也。（中略）龍南の文壇、さりととはさびれたる哉。（中略）この下等なる快樂主義者に與せむよりは、記者は尙彼の滑稽なる修養家を慕ふの念に堪へざる也。（中略）龍南の演壇の寂寥を感ずること亦甚し。（中略）運動界を見るも庭球部の氣焰高きあれど、野球部は將さに衰滅に歸せむとし、擊劍、柔道、短艇衰へたりと雖も、進歩の跡はあらず。故に記者は「死せる平和」と云ふ。（中略）國家が運命を賭（原、嗜）しての大戦中、國民教育の名の下に陶冶せられつゝある青年學生は、著しく愛國家にあらざりしにあらずや。云云

と龍南の沈滞を難じ、第二百二十號の「龍南一束」には、

勿論去年九月以來の事件は、正しく吾五高の一大革命に非ずやと、然り、革命と云へば之亦革命の一なるべし。而も之

れ局部的革命なりき、偶發的革命なりき。吾人の所謂總體的革命は與らず。見よ、其以後に於ては、果して革命に必然隨伴し來るべき何等建設の新曙光を認識し得たりしや、（中略）故に曰く、龍南の革命時代否革命準備時代は正しく今日に在りと。（中略）

松浦新校長の就任以來我校の改善發展に志し、以て吾校をして天下高等學校の模範たらしめんと、吾人寔に同感に堪（へ）ざる所なり。而して其改善の第一着歩として具現せられたるものは、即ち擔任教官制度なり、今や社會の風教盡く弛廢し、友誼淡き事水の如く、師弟の間、又沓（原、沓）として吳越の人の如し。當年死生の間に出入し艱難相濟ひたる師弟の美風、今將た何れの處ぞ。擔任教官制度の生じたる深因、正に此中にあり。（中略）吾人は、之を以て一種の彌縫姑息の手段たるに過ぎざるものとなさんとす。由來師弟兩者間に於ける交情の如何の如き、生徒操行改善の如き、皆是れ人間内在の幽玄なる心的問題に屬するものにして、單に此等形式的制度を待つて始めて決せらるべきものに非ざるなり。規則と云ひ、法律と云ひ、單に一片の裝飾的空文に過ぎず。龍南八百の人の愚昧多く事理に暗きものあるべしと雖も、猶且多少の信念と主義とを包有す。忠君愛國と云ふが如き平明なる道德律を迄、他人の注意によりて始めて意識するが如くに爾く、愚鈍なりとは思はれざるなり。此間の消息は、偏に生徒個々の自治的精神によりてのみ解決せらる。此を外にして又何物の干涉か之有らん。上來の事、或は、吾人の曲解偏見に屬すべし、（中略）吾人は、切に吾人が言の曲解偏見となり了せん事を希ひて止まず。云云

と擔任教官制度を批判して居るが、生徒監に就いても亦、四十年三月三十一日發行の第二百二十二號の顯晦錄に於て、忌憚なく論難擲論して居るのである。

然るに、第二百二十號（四一、四、三〇）には、「龍南樓の設立に就いて」と題する、愉快な一文がある。曰く、

龍南!!! とは實に是れ、我が七百の健兒が朝に夕に精勵、神身を鍊り以つて他日雲に駕し、天に驅けるべく三歳の月日を送る第五高等學校の名なり。吾人、龍南てふ一言を耳にする毎に龍の雲に駕し、虎の曠野に嘯くを思ふ。

然るに、昨年末に至り、我校の門前、突然一新建築を生じ、屋上麗々しく龍南樓と掲ぐ、吾人は實に奇異の感と嫌惡の念を以て之を迎へたり。而して龍南樓の名、尙忍ぶべし、傍書して、腰掛一ぱい、と云ふに至つては實に我が校を辱しめたるものなり。

と、禁酒問題のさなかに、皮肉な現象であつたに相違ない。而してその龍南樓なるものは、その他の商家と共に、熊本高等工業學校の運動場擴張の爲に買収されるまで在つて、本校の猛者連中が、腰掛一杯をやつて居たとか。而して又、

教授のつめ襟は減少するの傾向を示し、はいから氣取の學生は、増加すべき傾向を示す。この減少と増加とは、たゞ二つの事實のみ、何等因果的關係の、この間に伏在するかは吾人の知る所にあらず、(四一、六、一八、第百二十六號「片々」)

と寸鐵を向けて居るのも、今からすれば痛快である。筆者在學の頃までは、固より詰襟に木履で、平然たる人も少くなかつたやうだ。背廣姿は颯爽たる青年教授ばかりで、五指を屈するに過ぎず、記憶を辿つて列舉することも出来るくらいであつた。

引用が多過ぎて、冗漫に失するやうでもあるが、内面的にして對蹠的なものを、二篇だけ舉げて見たい。その一つは、第百二十九號(四二、二、二八)に、「時代と青年」と題し、その三、倫理主義の三派として、

茲に自分が云ふのも、時代青年と尤も交渉の深い社會人士の一方面に起つた人生觀の三派である。新ロマンチックの倫理觀。平凡主義・虛無主義の倫理觀。動搖せる青年思潮は漸く古い倫理を棄、新しい空氣圈に入らうとする。優勝なる

意志の憧憬、強烈なる刺激(原、戟)の欲求。吾以外の吾も無いと感じた刹那に起る、憂悶、寂寥は宗教の呪咀と成り、同情の敵視と成つて、何處迄も、自己を發展さして行かねばならぬ。何やら重い無形の鉛が、青年の心を壓し付ける。之を排除して特立獨歩、孤影を天地人間の巷に投じて、倦(原、倦)く迄、其の隻影の印象を強くせねば已まぬ。云々と語つて居るが、他の一つは、「獨座偶語」(二)と題して、

實にや英雄崇拜の風地を拂ひ、上下皆陋劣なる自意識の中に窒居屈座して、以て自我の發展と呼ぶ。噫、自我か、自我か、彼等貧弱なる識と、偏狹なる才とを以て、憐れむ可き自我を伸さんとす。

と非難して居るのである。

◇——◇——◇

學校當局に於ては、三十九年六月十三日、三十三年の評議員假規定を本規程となし、十一日七日には、事務員服務細則を作るなど、大いに内容の改善充實に力めたのであるが、四十年二月二十八日の教授會に於ては、風紀取締、品性陶冶の件に關して討議し、松浦校長は、先般保證人廢止に伴ひ、師弟間の情誼を厚くする爲に、それに代るべき何等かの方法を講じたい、と内意を漏し、諸教授よりは、從來の監督は殆ど効用なきこと、禁酒問題の實行難なること、生徒にはなるべく干渉的處置は行はざること、生徒の監督訓育の方法としては、保證人に代るべきものとして、生徒の緣故ある教官に依頼し、父兄の書狀を持ち、教官の承諾を得た上で、届け出でさせることなどの意見が出て、それに基づいて檢討攻究した結果が、「擔任教官規程」二條である。

又、九月より、入學宣誓の式を廢して、本年から實行することに定めたが、宣誓簡條は、そのまま存在するので、なほ十分服膺して、誤解のないやうにしたい、と通知するところがあつた。而して由比教頭の「剛毅木訥論」が、第百二十九號



を飾るかと思へば、第三十四號（四三、二、二八）には、「新しい地盤に立て」と題して「剛毅木（原、朴）訥を骨董屋の土藏の中に葬つて終いたと思ふ」と叫ぶ者も出て居る。

四十三年十月十日は、創立第二十周年記念日に當り、來賓總代として、元細川侯爵の懇篤なる祝詞もあつた。十月三十日には、教育勅語發布第二十周年記念式を挙げ、川路熊本縣知事の推薦係る、菊川菊池郡城小學校長の、懇切にして趣味深い講話があつて、龍南人に深い感銘を以て傾聽されたこと、十一月三日の杉山教授在職二十年祝賀會、四十四年五月十九日の校風及集會所規則に關する臨時演說會、四十五年二月五日、縣廳に於ける熊本學生保護會議なども、茲に記して置くべき事柄であらう。

かくして時代は、明治より大正に移つて行つた。

—◇—◇—

明治天皇の御異例に就いては、七月二十三日、松浦校長の名を以て、宮内大臣、皇宮職大夫、東宮職大夫宛、電報を以て「御機嫌伺」の執奏を依頼し、職員生徒兩總代の名を以て、神宮司廳宛、「本校職員生徒一同謹ミテ天皇陛下ノ御平癒ヲ太廟ニ祈リ奉ル、幣帛料十五圓奉納ス、宜シク御取計リヲ乞フ」と電報を發し、明日、その旨生徒にも通知し、且、「官報新聞等ニテ御容態を拜承シ、日夜謹ミテ御平癒ヲ祈リ奉ルベシ」と命じたのであるが、七月三十日、遂に御登遐になると、

天皇陛下本日午前零時四十三分御崩御アラセラレタリ、制服着用（靴黒色）直ニ登校スベシ

尙、心當リノ滯熊中ノ生徒ヘハ傳達アリタシ

と云ふ通知を出し、一般の生徒に對しても、職員及在熊生徒直ちに登校し、校内に於て遙拜式を舉行したこと、各自深く

哀悼の誠を効し、「臣民の儀表」となることを力むべきことなどの注意を與へて居る。九月十三日夜の遙拜式の模様や、十三日より三日間の休業等、記すべきことも少くないが、その生徒側の記事を、雜誌に依つて例示すれば、

七月二十九日

先帝陛下昨夜危険なる御容態に成らせられ、校長よりも特に電報を以て御通知あり。我等は心中切に御平癒を祈り奉るのである。云云

七月三十日

陛下崩御の悲報あり。一同茫然爲す所を知らず。嗚呼何たる不幸の日ぞ。六千萬の赤心こめし祈願も水の泡に歸したのか。校長に水泳部の今後の處置を打電すると、擦違ひに校長よりは今朝午前六時水泳部の解散を命ぜられたる電報がついた。直に解散を全員に告げた。皆倉皇行李をたたんで歸路についた。云云（第百四十八號雜報「水泳部日記」）而して十月十二日より、往復一週間を以て職員生徒一同、桃山御陵參拜修學旅行を爲した。筆者もその一人であるが、雜誌第百四十八號の雜報には、「思ひ出の記」として、その事を具さに書いてある。恐らく、部長の本田（弘）教授の手記であらう。

明治神宮獻木のことは、勿論本校だけではないが、大正六年二月二十三日付、松浦専門學務局長より吉岡校長宛の通知に依れば、當時の駒場の農科大學に依托して、苗木を奉納したが、本校分の支出は百二十八圓、職員五十四人分四十三圓、生徒八百五十人分八十五圓で、大正四年十月二十三日付で、瀬戸第一高學校宛、銀行小切手を以て送金して居る。

昭憲皇太后陛下の御容態に就いては、大正三年四月九日吉岡校長名を以て、「天機を奉伺」し、四月十一日午前二時十分、

御登遐に付、同日午後一時二十分より雨天體操場に於て、敬悼式を舉行。五月二十四日の御大葬遙拜式は、午前八時より、明治天皇とほぼ同様の形式を以て、嚴肅に執行。六年四月十一日には、午前十時より、その式年遙拜式も舉行された。

大正天皇御即位禮奉祝式は、四年十一月十日午后二時より、雨天體操場に於ていと嚴かに執り行はれた。而して御大典跡拜觀修學旅行は、参加生徒七百數十名、同年十二月二十日に出發したことが、庶務課日記に詳らかであり、五年十一月三日午前九時十五分より、立太子禮奉祝式を舉行し、職員生徒一同、奉祝の提灯列を催したのである。

◇ — ◇ — ◇

此の期に於て一言すべきことは、習學寮改築の経緯である。筆者二年の第二學期、即ち大正二年の二月、三十餘名のチフス患者を出し、可惜尊い九名（後更に一名）の魂を失つたため、二十七日より三月二日まで、臨時休業、寮も閉鎖され、動搖不安の日が続いたが、四月十四日、武夫原に於て、遺族を招じて、追悼慰靈の祭儀が、嚴かに行はれた。

かくて、この年の十月二十三日付を以て、松浦校長は、名残りを惜まれつつ勇退し、文部省督學官吉岡郷甫氏を、校長として迎へた。然るに間もなく、翌月の末頃より、又復寮内に於て、バラチフスや赤痢の患者續出、臨時休業、寮生の外出禁止、續いて寮の閉鎖、校外寮の設置等、前同に増して騒然たるものがあつた。瑞邦館に於ける生徒大會の席上では、學校當局の彈糾、試験延期、學校の福岡移轉すら叫ぶ者もあつたほどである。

かくの如き事情で、遂に南・北二寮を解體焼却して、四年には第二・第三の二寮が新築され、五年八月には第一寮も落成して、茲に全く面目を一新して了つた。「舊（南・北）二寮は自習室が八人、寢食が十六人一組で、各室には室長があ

つた。（中略）習學寮の滅亡は、明治的龍南の滅亡と奇しくも符合し、大凡此の時期を轉機として龍南は新時代に入り、剛毅木訥も姿を變へるに至つた。」と、寮史にも書いてある。それは、申すまでもなく、従前の自習室は階下に板張りであつたのが、階上階下ともに畳敷きとなり、一室の人員も二・三人に減じ、従つて、室の数が著しく増して來た爲である。

## 註

「剛毅木訥」に關する字句が最も早く見られるのは第二號「小野紀行」中の「木訥生」である。元來校風なる語は屢々演說者又は雜誌記者によつて唱へられてゐるが愈二十七年五月第二十七號に「非上文部大臣巡回の項中始めて「天真爛漫剛毅木訥」の字句が見ゆるが之が九州の青年を指し諳に龍南の健兒を指してゐる。廿九年十月第四十九號にラフカヂオハーン氏が「九州學生と居る」に木訥（Rugged）剛毅の氣質することを指示してゐる。而して雜誌記者が公然校風の綱領として剛毅木訥を標榜したのは三十一年十一月第六十八號雜報欄内にある。又卅五年以來は盛に唱道（原、導）せられてゐるが要するにその由來は不明である。云云

◇ — ◇ — ◇

大正二年、熊本市長、各新聞社長、その他名士の贊助によつて、中華民國留學生との親善を圖る目的を以て、「泰東會」なるものが出現した。翌三年六月、オーストリア皇太子夫妻が、ボスニアの首府サライエヴオに於て反奥的祕密結社の一青年によつて暗殺され、遂に世界大戰へと擴大した。而して我が國は、日英同盟に基づいて參戰し、八月二十三日には、對獨宣戰の詔勅は下り、十月には、赤道以北の南洋諸島を、十一月には膠洲灣を制壓するに至つた。筆者も亦、同年秋の發火演習の際、柳河に於ける青島陷落祝勝の提灯行列や、翌年夏に行はれた、ナムバー・スクール及北大豫科生徒の希望者約九十名から成る、南洋群島見學旅行に、五高班十一名の一員として參加したことを想ひ起す。

然るに、前述の通り、明治の末葉には、社會主義的思想の影響を蒙り、「革命」なる語を無造作に使ふやうになつた向

もないではないが、大體からすれば、自然主義や世紀末的頹廢思潮から、新理想主義への萌も見えるやうになり、大正の初期に於ては、自然主義も行き詰りの形となり、新理想主義、新浪漫主義、新現實主義などがそれに代らんとし、三年頃には、人道主義的文藝作品が、旺盛を極めるに至つたのである。

又一面、大正五年、東京帝國大學の吉野（作造）教授が、『中央公論』誌上に、デモクラシーを喧傳し、京都帝國大學の河上（肇）教授が、『貧乏物語』を著して、青年學徒に愛讀されたことや、大正七年、東京帝國大學學生の一部が、『新人會』を組織し、『人類解放の新機運に協調して、その促進に努力する事』『現代日本の合理的改造運動に従事する事』等を目標として活動したことも亦、人の克く知る所であらう。而してそれ等の思想なり思潮なりが、龍南人に及ぼした影響に就いては、次項の『中期』に略述するが、ただ、マルクシズム隆盛への過渡期として、筆者卒業當時の大正四年から數年間は、龍南思想史上の轉期とも稱すべく、樗牛・漱石・白村・玉堂・ニーチェ・ベルグソン等の著作が愛讀され、自我の擴充が叫ばれ、演壇に於ては、主として思想問題が賑やかであつた事だけを記して置く。

#### 四、高校 中期

大正八年より  
昭和十二年まで

大正七年十二月五日、勅令第三百八十九號を以て、『高等學校令』が發布された。即ち、高等學校は、男子の高等普通教育を完成することがその目的で、特に、國民道德の充實に力むべきこと。（第一條）修業年限を七年とし、高等科は三年、尋常科は四年とするが、高等科のみを置くことも出来る。（第七條）高等科を、文科及理科に分つこと。（第八條）高等學校大學豫科は、大正十年八月三十一日まで存続すること。（附則）などが定められた。本校に於ても、吉岡校長の綿密周到な考窮の結果、八年六月二十三日、學則が改められて、文科及理科となつた。筆者が斯の年以後を、高校中期と爲す所以である。而して中學四年修了を以て、入學資格とする年限の短縮と、高等學校を單に大學豫科とせずして、獨自的教育機關とすることに於ては、明治二十七年に於ける、井上文部大臣の意圖が再現して、時代に相應はしい形態となつた觀がある。而して學年は、中學校と同じく四月一日に始り、翌年三月三十一日に終り、連絡に於て約五箇月の短縮が出来、四年修了者よりすれば、その上一年間の短縮を生じた事になる。然しながら、四年修了者の高等學校入學は、その數が極めて少いばかりでなく、高等學校高等科の卒業者にして、直ちに己が目的の大學に進む者も、全體の幾割かに過ぎず、さればと云つて、大學を増設することも、高等學校を減少することも、至難である爲に、十三年後の昭和七年度よりは、各組四十人の定員を、三十七人に減じ、同九年度よりは、更に三十人に減じて、多少の緩和策を講じたけれども、大學の入學難は、依然として變ることなく、而も各大學に依りて、甚だしい相違を示し、年限短縮の目的は、殆ど其の幾分をも實現されては居なかつた。尙又、部分的に申せば、醫學部もしくは醫科大學志願者が増加した結果、昭和六年度以後は、理科を(ハ)